

# 米軍戦力分散 沖縄の負担は

## 嘉手納基地 戦闘機ローテ配備



米軍嘉手納基地の戦闘機の配備状況

機種	数量	配備時期
F15	約50機	22年10月
F22	14機	22年11月
F16	12機	23年春ごろ
F35A	12機	23年9月
F15E	24機	23年9月

米軍嘉手納基地（沖縄県）で、常駐するF15戦闘機を段階的に退役させ、最新鋭機などを半年ごとにローテーション（巡回）配備する運用が続いている。極東最大級と謳われる嘉手納基地だが、中国との距離の近さからリスクが指摘され、戦力を分散させる戦略に移行した。識者は沖縄への兵力集中で抑止力を維持するとしてきた日本政府の方針が揺らいでいるとして、沖縄の負担軽減については「べき」と指摘している。

防衛省沖縄防衛局などによると、嘉手納基地には約50機のF15が常駐していたが、昨年12月から老朽化を理由に順次米軍に帰還し、9月末時点で約20機。米空軍関係者によると、二つの部隊は一つとなった。計2年ほどで退役を終えるという。常駐機の減少をカバーするため、昨年11月には米国の基地から「最強」といわれるF22が14機、今年1月にはドイツの基地からF16が12機、暫定配備された。3月には最新鋭のF35Aが12機、4～5月にはF15Eが24機、新たに米国の基地から飛来し、暫定配備された。これに伴い、F22とF16はすべて米本土などに帰還した。常駐機が減ることによって、抑止力の低下につながる」との指摘もある。嘉手納基地を運用する米空

軍第18航空団のニコラス・エバンス司令官は8月下旬、朝日新聞の取材に「最新鋭のF35AやF15Eなどの戦闘機が嘉手納に展開し、即応性を維持している」と強調。「複数の分散した拠点から作戦を実行できる能力がある」とも述べた。米軍の運用変更は、米空軍の「ACE」（機敏な戦力展開）という新たな戦略に沿っているとき、他の長射程ミサイルの配備などで「（基地の）危険性が著しく増した」と記述。常駐する航空戦力を幅広い拠点に分散させることで、リスクを減らす戦略だ。

米戦略・予算評価センター（CSBA）の昨年11月の報告書は、沖縄の基地について「中国の多数のミサイルと近接し、最も脆弱な拠点の一つ」と指摘している。米空軍が嘉手納基地に最新鋭の戦闘機を巡回配備し、アジア太平洋地域の各地で活発な訓練を続けている背景には、こうした情勢認識もあるとみられる。今後の嘉手納基地で焦点となるのは、F15を退役させた後の運用だ。CSBAの報告書は2030年までに戦闘機を当初の約50機から最新鋭のF15EやF22以上に置き換える案を示した。将来の配備機や機数は公式には明らかにしていない。一方、沖縄防衛局は6日、米空軍が海上自衛隊鹿屋航空基地（鹿児島県）に一時配備している8機の無人偵察機MQ9

## 「基地集中は脆弱」指摘も

安全保障政策に詳しい沖縄国際大学の野添文彬准教授は「日本政府は沖縄に兵力を集めることを抑止力と見なしてきた。だが、沖縄への基地の集中は軍事的にも政治的にも脆弱だ」ということを踏まえ、より負担を分散・軽減していくことが沖縄のために日本の安全保障のためにも必要だと指摘している。狭い場所でも運用できる小型無人機の配備

が嘉手納基地に移駐し、11月から運用を始めると地元自治体に説明した。CSBAの報告書でも、MQ9や、多数の小型無人機の嘉手納配備を提案していた。嘉手納基地で始まった巡回配備の影響で、周辺自治体は騒音がさらに深刻化したと指摘する。沖縄県が嘉手納基地周辺の15地点で測定するデータ（週報値）によると、騒音発生回数は昨年10月に約1万2500回だったが、今年1月には約2万1500回を記録。その後減りつつあるが、7月も約1万6700回の騒音が確認されたと。聴覚に異常をきたす

## 騒音が深刻化

恐れのある1000程度の騒音も増えた。嘉手納基地が立地する自治体の協議会によると、F35A配備前後の3月と6月を比較したところ、パチンコ店内に例えられる90分を越える騒音が発生回数は沖縄市で約44%、嘉手納町で約32%、北谷町で約15%、それぞれ増加したという。嘉手納基地に近い上野区自治会の仲業真盛二会長（72）は「音の大きさがひどい。電話は全く聞こえない」と訴える。

（小野太郎 読者声）